

「牧師室」(2016年5月1日)

昨年の10月に「朝日新聞」の「ひと」欄で紹介された小熊英二さん(53歳)の著書を今般読む時間が取れました。それは同氏の父親である小熊健二さん(89歳)が語る歩みを『生きて帰ってきた男—ある日本兵の戦争と戦後』と言う書物にまとめたものです。父親は19歳になったばかりで、徴兵され、旧満州に送られ、過酷な抑留生活を強いられた人です。実際に帰国出来たのは1948年になってからです。

著者自身が言うように、「シベリア抑留」から帰還した日本兵の経験談は、多くの著書となって残っており、わたしも以前の教会員でそういう経験をされた方と親しく接しました。また、それぞれ故人ですが、帰還後牧師となった人も知っています。それら多くの人に関係する書物と比較して、本書の特色は、父親の生後の家族の詳細な記述から始まり、戦前・戦中・戦後の日本の生活史がにじみ出ていることです。決して裕福ではない生活の匂いが多いページで感じられます。物語は一家の北海道移住から始まり、一人一人上京する話に続きます。結核に良い治療薬が無く、20歳前後で亡くなってゆく主人公の子どもたちの姿が胸を痛めます。戦争が始まると、入ってくるニュースは、日本が勝っている話ばかりであったことなど、多くの人が度々聞いて来たことです。45年8月9日、この日の未明、ソ連軍が国境を超えて侵攻してきたことは、わたしたちの年齢の者であれば、誰もが知っていることです。日露間に不可侵条約が結ばれていたにもかかわらずです。一度勃発すれば、戦争は甘いものではありません。

(次週に続く)。